



福生市体育協会会長

三ッ橋 誠一さん(83)

あの目を
忘れない

戦後75年 語り継ぐ記憶⑦

その翌年の10月、母親のひちさんが急逝した。父親の茂さんは病が元で耳が聞こえず、戦時下で男手一つでの子育てを案じる親戚から、三ッ橋さんの妹を養女に出すことをすすめられた。「一切会わない」という約束が交わされ、2歳になる前だった妹は養女へ。茂さんと三ッ橋さんは父子二人で暮らした。僕も状況が分かるから、ただ黙っていた。約30年後に再会するまで、兄妹が言葉を交わすことはなかった。

1942(昭和17)年から始まった東京空襲は、1944(昭和19)年11月から回数を増した。1942

東京大空襲

防火用水の中の亡骸

一方、三ッ橋さんの父親の茂さんは警戒警報や空襲警報が聞こえず、夜に近所の人がドアをたたき音で目が覚めた三ッ橋さんが、茂さんを起して防空壕へ向

かった。1945(昭和20)年1月からは牛込区でも空襲を受け、茂さんは青梅の親戚への疎開を決意した。そして3月9日、茂さんは家財道具を知り合いの経師屋に預け、生活必需品をリヤカーに積み、7歳だった三ッ橋さんと一緒に青梅へ向けて出発した。市ヶ谷から二人で歩いて、丸一日の道のりだった。「親父がリヤカーの端に私が乗れるスペースを作ってくれて、旧青梅街道をずっと歩いて、村山野水池の辺りでくたびれてリヤカーに乗ったんだ」。暗くなり青梅に着

翌日から、茂さんと三ッ橋さん父子は電車に乗り、片道2時間ほどかけて浅草に連れ続けた。消息が分からない祖父や叔父、叔母を捜し、焼野原になった下町を歩いた。道端にはけが人があふれ、隅田川の土手には遺体が並べられた。どうしても顔を確かめられないういけな。ひどいやけどを負っている人もいて、医者じゃないからどうともできない。何百、何千人と顔を見ていった。

祖父や叔父の行方は知れず、父親の茂さんは家のあった辺りに青梅の連絡先を記した杭を立てた。その後、千束小学校の地下水槽に衆蔵さんの持ち物らしきザックが浮いているのを茂さんが見つけた。遺体は見つからないまま、4月11日と13日に叔父と祖父の死亡証明書が出された。

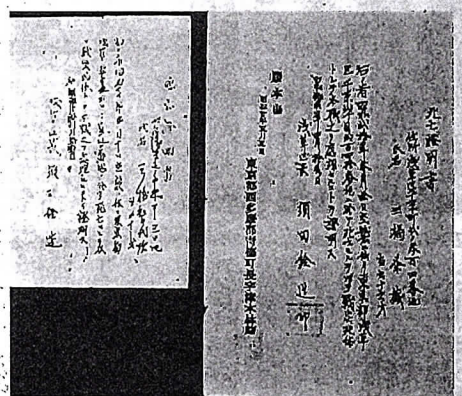
三ッ橋さんにとって衆蔵さんは、遊びに行く近所の駄菓子屋に連れて行ってくれる優しい祖父だった。「祖父は隣組長をしていたから、叔父と二人で頑張ったと思う」。やがて8月15日の終戦を迎えた。

叔母の綾子さんは、浅草と向島両方面から逃げる人々であふれた言問(こととし)橋の下側に避難し、川に落ちないよう骨組みにしがみついて炎を逃れた。お互いの無事を知ったのは夏になってからだ。

都立横綱町公園の一角に建つ東京都慰霊堂には、東京大空襲を含む東京空襲犠牲者の名簿収納室がある。三ッ橋さんの祖父と叔父の名は33巻目に記されている。三ッ橋さんは毎年3月10日の慰霊法要に訪れ、浅草の千束公園に足を運ぶ。あの日、祖父の遺品が見つかった小学校の方向へ、そっと手を合わせる。

◇ 終戦から75年。戦争の記憶を語る声を紹介します。問い合わせは編集部(042-210-2222・042-210-707)へ。

「防火用水の中の黒焦げの遺体、赤ん坊を抱いた母子らしき遺体に、子どもながら絶叫し、涙した」。福生市福生に住む三ッ橋誠一さん(83)は、1945(昭和20)年3月10日の東京大空襲の後、浅草に住んでいた祖父や叔父の行方を捜し、父親の茂さんと一緒に青梅から浅草まで通い続けた。この空襲の犠牲者は、一晩で約10万人といわれる。焼野原を歩き、道端や隅田川の土手に横たわるけが人や遺体の何百、何千という顔を確かめていった経験は、今も忘れられない。(澤村みどり)



三ッ橋さんの祖父と叔父の死亡証明(右から)

いたその日の夜、10日に日付が変わった午前0時8分に東京大空襲が起こった。

三ッ橋さんにとって衆蔵さんは、遊びに行く近所の駄菓子屋に連れて行ってくれる優しい祖父だった。「祖父は隣組長をしていたから、叔父と二人で頑張ったと思う」。やがて8月15日の終戦を迎えた。

叔母の綾子さんは、浅草と向島両方面から逃げる人々であふれた言問(こととし)橋の下側に避難し、川に落ちないよう骨組みにしがみついて炎を逃れた。お互いの無事を知ったのは夏になってからだ。

都立横綱町公園の一角に建つ東京都慰霊堂には、東京大空襲を含む東京空襲犠牲者の名簿収納室がある。三ッ橋さんの祖父と叔父の名は33巻目に記されている。三ッ橋さんは毎年3月10日の慰霊法要に訪れ、浅草の千束公園に足を運ぶ。あの日、祖父の遺品が見つかった小学校の方向へ、そっと手を合わせる。

◇ 終戦から75年。戦争の記憶を語る声を紹介します。問い合わせは編集部(042-210-2222・042-210-707)へ。